

日本生涯教育学会年報創刊によせて

岡 本 包 治

(日本生涯教育学会会長
立教大学教授)

いま、日本生涯教育学会は学会年報第1号を公にすることになった。

いうまでもなく、生涯教育が今後いかなる実質をもつことになるのかは、おそらく誰にも予測しがたいことであろう。しかし、本学会とそのメンバーは、この課題の理論的究明と実践的展開・評価に取り組む所存である。とりわけ、生涯教育の実像の具体化に我々はもっとも関心を抱き、そのために最大のエネルギーを傾けることになろう。科学のための科学でなく、人間の生活のための科学をめざす学会であるからである。

そしてこの課題は、既存の特定科学のみの担いうるものではない。日本生涯教育学会が関連諸科学者と関係諸実践者を広い範囲にわたって糾合し、発足したゆえんである。とはいえ、本学会の現メンバーでもってその必要な人材を満たし得たとはいいきれない。今後とも本学会の発展とともにより多くの同志を募っていくことになるであろう。

科学的研究というものは、その研究領域・研究方法の拡大志向性を意識しながらも、現実には自らの固有のフィールドの中にとじこもってしまいやすいもののようである。しかし、おそらく生涯教育の研究は、その領域と方法についてどん欲な拡大志向性を当面は持つものと考えている。しかし、このことは無限の拡大活動を意味しない。その研究のワク組みが確立すれば、焦点的な探究活動に転じていくことにもなる。この両極的な研究活動のダイナミズムを本学会は永く持続するはずである。

また、「生涯教育」はともすれば現代的な響きでジャーナリスティックな

受けとられ方をされやすい。しかし、日本生涯教育学会がとらえているそれは、全く異質のものなのである。人間の、あるいは現代人の学習活動の本来的・根本的な解明とそれに対応する歴史的所産としての諸システムの原点的な構築をめざす以外の何者でもない。いうなれば地味で目立たない研究であるともいえよう。しかし、それだけに時流を超えうるものでもある。それは無地の布地が持つ輝きといってもよい。そうした研究への姿勢こそが、いま生涯教育研究に求められているのだと断言したい。

なお末尾ながら本学会年報第1号が世に出るべく最大の尽力を下さった(株)ぎょうせいに謝意を表したい。

1980年11月